現跡也然權現本是彌陀也究論於本則上人者亦是彌陀應現也震旦化善導日域現白道二士攝化勸策均趣雖經千歲猶寒松一色焉宜哉滅後雖已及百有餘載威光倍增緇素崇敬遺像宛如眞佛大權應現誰不信之者乎

洛北　五却院主　喚譽誌

聖問禪師繪詞傳序

古稱青出於藍而青於藍染使之然也予往歲董無量山之日會下有修開山了譽聖問禪師繪詞傳擧予曰善哉夫祖先有善無偉行而不傳之後世則子孫過也抑禪師乘閒世之運盡切磋之力歷事實勝慧三師以究列祖之蘊奧暨其建法幢也電掣雷震慈雲覆一世摸範垂萬代示寂四百年于今遺教

餘澤綱經蓮門滔々乎變葉綿々焉功烈如此而世不詳之實爲可恨也禪師行狀先以漢文行然而印本已乏流行亦尠今演爲和語繪之詞之欲今讀者易通見者生信於戲斯擧也可謂有兒孫之任在矣哉若夫盛德洪業詳之傳文則知拔三師之菩提八宗之要出於藍而靑之實無今年刻成需予閱且序由加一覽題隨喜於其卷首時文政二年

已卯九月廿七日

三緣山大僧正騰譽實海識

了譽聖問禪師繪詞傳序

文政已卯初春予侍
知門大王于華頂一日得無量山第二座玄
迪上人之手簡於郵亭開緘則說吾　開山
禪師今年爲四百遠忌會下大衆議再修行
狀擬香火師夫速東下振毫云爾予固無文
曷堪其任雖然已挹　禪師之流霑法潤久
則不可以固陋而辭乃遽治行就道暨至江

府謁騰譽大僧正大僧正促曰　問禪師遠
忌迫也急起筆矣先之無量山下了道者訪
　禪師遺蹤千常州儅諸國所視聽之事
實顯此乎畫圖也於此予濫從事筆硯專據
古傳少加見聞轉漢爲和者由衆請也嗚呼
拙工叨代斷何免不傷指乎唯志在讚揚懿
德布之遐邇芳於終古報慈恩乎萬一而已
此擧也玄迪上人倡之首座寬諄上人應々

闔山隨喜贊成之也同年季秋　大王隨例東下焉予陪侍謁　柳營而方會　禪師遠忌之正辰至無量山則繪詞傳已上木　於是乎直記再擧顚末以爲之序文政二年已卯九月至誠心院大僧都鳳譽鸞洲於東都無量山撰

了譽聖問禪師繪詞傳上

禪師諱は聖問、酉蓮社了譽と號せり、常陸の國の人なり、父は同國久慈郡嚴瀨の城主白石志摩守（源姓）宗義、新羅三郎義光の後胤にして佐竹の氏族たり。母は橘氏の女なり、宗義盛年を過て世繼なきことをうれひ、夫妻心を一にして、偏に冥の加祐を仰ぎ、近きわたりに跡をたれ給ふ嚴瀨明神は和光の威權いちじるく、いまそかりければ殊更に一七日を要期して、歩みを瑞離の內にはこび、社頭にぬかづきて懇禱の誠をぞいたされける。

神明その精誠を照覽ましく〳〵けるにや、第四の夜にあたりて、揭焉の靈夢を感せしが、幾程なくして　橘氏妊娠を覺ふ、遂に光明院の御宇曆應四年　辛巳正月二十五日、嚴瀨の城中にして男子を平產す、父母喜びもてあそびて、あだかも掌　上の玉におなじ、誕生の地において、後世一宇の精舍を建立し、誕生寺と號す、（廢城の跡荒原となりしに、常福寺十八世眞譽相閑上人その故墟をとめて草創ありしなり）師誕生の時、產湯に用ひし泉あり、誕生水と名く、服するに功驗多しとて、土俗來りくむもの今にたへず。

所生の幼兒其さま凡ならず、面に光彩ありて、聰明倫にこえたり、頂骨高く聳え、額に纖月の形をあらはす、縱に襁褓をはなれて、起居餘兒に群せず、犬をはせ鷄をたゝかはしむるの戲れ

を好ます、かりそめの手すさびにも文筆をもてあそび、諸藝を習ふ、日を問に違近なわかち、
帙をひらひて之無を違ふるとなし、いかにもおひさき頼もしく、家の風をもふかせてしかばと、
二親の衆ともげにとぞ思はれける。
幼兒五歳の時、兵亂の事ありて、四境堵を安せず、程なく敵軍寄來りければ、宗義むかへ戰ひ、
武備森然たり、兩軍相さゝへて、いまだ雌雄をわかたざりしに、流矢來りて、宗義の喉にたつ、
急處の痛手にこらへずして落馬せしが、矢疵深くして戰場に命をおとせり、寄手勢ひに乘じて
せめかゝり、先を爭うて殺到す、味方將師を矢ひて、戰ふに力なく、士卒つゐに散じて、隊伍
もとゝのはず、かゝりければ城に孚りの兵なく、敵軍みだれ入りたり、家族の老幼今は防ぐに
術なく、立のくべきに定まれり、母堂は幼兒を携へて、そこともしらず落行きぬ、相隨ふ男女
數人には過ざりけり（此時天下南北兩朝に別れ、常州は兩朝の徒諸郡にありて、干戈やむとな
かりき、幼兒の五歳は貞和元年にて、南朝の興國七年なり、去年北畠親房卿當國關城にあり
て、賊軍の爲に敗られ、奥州白河の結城親朝に援兵をこはれしと諸記に見ゆ、此時官軍瓜連に
栖遁れり、膨瀬とは地境相接せり、今の兵亂恐らくは此折柄なるべし、然るに宗義は南北兩朝
何れに屬せしやし難し、當時水府の藩中白石氏も佐竹の一族なり、同家に古文書數通を藏す、
其中に觀應二年魯氏將軍より賜ふ書に、於常州離一族中最前馳參御方云々の文によれば、白石

氏初め官軍に屬し、此時將軍方になりしと見ゆ、但し志摩守亦爾なりしや計り難し、又同國那
珂郡田谷村に岩瀨を去ること舊壘あり、土人白石の城と云ふ、或說に昔時白石志摩守住せられしが、
額田氏の佐竹の族同郡額田の城主爲に滅ぼされしといへり、もしや志摩守居を田屋村に移し、額田氏の爲に
滅ぼされしにやあらん、但し記錄の證とすべきもなく、口實のみなれば、定說をなし難し、舊
板の師の別傳高僧傳等も其處を註せず、されば今の兵亂の地並に落城何處といふとしるべから
ず、偏に後人の考正を待のみ）
かくて資財盡く他の有となり、田園は皆敵に沒收せられぬ、山林に狼狽して寂をさけ、民家に
潛匿して身を保てり、うきが中にもとゞまりて、隙行く駒の足はやみ、うつりやすき月日の影、
心細き寵門の烟り、しのぶにつたふ玉水の、ながめさびしき軒の日めもす、木の葉をさそふ山
嵐、羽ぐゝむ袖のせまき夜すがら、小兒の黑髮かきやりて、かはきやらぬは懷舊の淚なり。
山里の棲居も花紅葉にかぞふれば、已に三歳を過ぎぬ、母堂は故志摩守戰死ありてより、人目
をつゝむ身にしあれば、供佛施僧の營みも、心の外にをろそかなり、聞き道にやたとり給ふら
んと、思ひやるさへ胸いたし、又此兒のさまたゞ人とも見えぬを、徒らに田夫野人の中におひ
立なんは本意なかるべし、まして宿世つたなきみづから、後の世をさへ、二世不得の身となさ
ん心ぐるしさ、こしかた行末をなげき思ふにつけても、實や瓜連常福寺なる了實上人は、淨土

の先達眞宗の棟梁として、智道のほまれ四海にみち、慈忍の德一時をおほへり、あはれ此兒を奉りて、亡父の菩提を弔ひ、我こん世もはた賴もしからんにはと、兒を伴ひ、常福寺に詣で、上人の見參にいり、志の程を述べ給へば、上人承諾して、やがて師資の約をなし、日をへて、剃髮授戒の式を行ひ、聖問とゞ名づけ給ひける、時に年八歲なりき、母堂は日頃のありましながら、棄恩入無爲の砌に臨み、過にし人の別れさへ思ひ出られ、眞實報恩者の言の葉に、蹈かかれとはしら玉の、悲喜の涙今更袂ぞぬれまさりける、上人語りて曰く、われ前の夜夢に虛空藏菩薩の來現を感じて、意にあやしみをなせり、今此俊兒を得て思ひ合する所あり、菩薩の靈告唐捐ならじ、他日長夜の法燈をかゝげて、苦海の迷途を照さむものは、かならず此兒ならんとぞ申されける。

上人試みに三經一論五部九帖を授らるゝに、いく程ならずして、訓詁皆通曉せり、十一歲にいたり自ら經疏を閱して、粗疑問をあぐるに、慧解天縱にして、義趣深遠なり、爾りしより、博く百家の書をひらき、あまねく內外の典を習ふ、年志學に及びて、切に翼塵を厭ひ、偏に閑寂を甘ず、膏油晷に繼で、經論の幽致をさぐり、寢食やゝもすれば廢して、佛祖の敎旨に、隨順せむことを要せり、欣淨の床には、一心專念して、四修の護りをぞそかに、奉律の窓には三業ならべ防ざて、十惡の園に臨むことなし。

上人かくて師の學窓年を經て、智解のさきさらに、劍をとぎ、精修功をつみて、道業の光り玉をみがくを見て、竊に思はれけるは、彼器量を計るに、我等が指南すべきものにあらず、諺にいへる、象兒は兎徑に遊ばしめずとは是ならんと、太田の老師蓮勝上人の許に送りて、宗旨の敎行を相傳せしむ、勝公目蹕して懷に愜ひ、敎諭深切なり、歷代の敎義一宗の祕奧授受の間師資相得たり、師付屬して殘すことなし、宛も空谷の響きを惜まざるに似たり、資敬ひうけて餘滴をもらさず、偏に一器の水を一器にうつすが如し。

蓮勝公又示して曰く、菩薩圓頓の妙戒は、山家の至寶なりといへども、吉水大師その正統を繼給ひてより、我蓮門の家珍たり、體相受隨の間、箕田の定慧公其奧旨をつぐけり、予稟承の身なりといへども、老邁にして、恐らくは、廢忘する所多からん、仁者よろしく、慧公に隨ひて、口授を審にすべしと、申されければ、師其命に隨ひ、旅よそふひをぞせられける、上人舉狀を定慧公に贈らる、其文に云く。

此聖問なる僧、智德逸群なり、定めてこの化來の人なるべし、愚下に於て憚り多し、仰き願はくば、尊下にして指南あらば、末世の導師たらんもの乎。

干時延文三年

定慧良譽上人

太田蓮勝

とぞかゝれける、上人もたゞ人ならぬに、筆をとりて、かく讃せられしは、定めて内鑑冷然の故なるべし、師は日頃函丈恩顧深く、師資の芳契あさからねば、別れに臨みて、餘波盡せずといへども、求法の重任なをざりならず、火の中もわけて行なん道なれば、やすらふべきにあらずと、三衣一鉢飄然として、上人の座下を辭せられける、箕田の蘭若を訪ふに、慧公はすでに、箕田を退きて、光明寺に移住あり、これによりて、鎌倉に赴るゝに、近頃此をも遁れて、桑原の道塲に隱居をなんし給へりしかば、亦も跡をとめて、錫をぞ振はれける。

定慧公ある夜夢みらく、文殊大士白毛の師子に乘じ、左手に一卷の經をとりて、あらはれ給ひ經は了義一切經と題せりとぞ告ての給はく、明日午時に東方より僧の來るあるべし、即ち我分身なりと示し畢りて、隱々として見え給はず、夢さめて奇異の思ひをなし、翌朝門人に命じて曰く、今日禺中に客僧の來ることあらば、速に我につげよとありしに、果して師錫を曳て至り給ひ、案内をこうて、蓮勝上人の書翰を呈し、座下にありて請益せんことをぞ、求められける、定慧公書翰を披いて、聖告のむなしからざることを信じ、さそくよびいれて、對面せらる、法門の清話往復景をうつすに、其顯悟神彩なること、一隅を擧ぐれば、三端をたて定慧公は法器を得て、宗敎のよするところあることを、喜ばれけり。

定慧公、翌日より講席をひらき、淨土の經論敎相行儀並に起信釋論等を演說せられけり、師淪受して循環研覈し、自他の鈔疏其微旨を得ざることなし、縗素預りきひてひとしく法雨にうるはへり、定慧公、或時述聞鈔を授けらる、師受よみて其要旨をさぐり、自得の趣を記して呈せらる、定慧公閲披して、宗意の骨髓を得たりと、印可せられければ、諸人その宏才を讃歎せざることなし、定慧公其成器を見て曰く、予此書の記をつくるまゝ思へども、考後朽邁せり、氣勞し躰うみて、いまだ果さず、幸に仁者此擧あり、よろしく潤色して後學を益すべしと勸められけり、師今年弱齡なり、他の批評を恐慮せられしかども、利物の師命默し難く、仁に當りてゆづるべきにあらねば、やがて師說を擧揚し、已が領解を附して、口決鈔をあらはす、是述作の初めなり。

定慧公深く器重し、肺肝をひらひて口授せらる、かくて二祖三代の宗義行相、及び圓頓菩薩の大戒附屬餘蘊なく、稟承圓備せり、淨土の傳燈此に於て光りをます、時に師二十五歲なり。下野國芳賀郡遲澤、大庭山往生寺に輪藏ありら、當寺に六坊あり、師は南瀧坊といへるに寓居せる師此に就て一代を徧覽せられけり、晝は寸陰を惜みて慧及を三藏に游ばしめ、夜は三業を攝して、口稱を六字にはげむ、寒暖しばゝ〳〵かはりて、智行かね進めり。

師竊に思惟せられけるは、淨土の眞門はやうやくその室に入といへども、聖道の廣居はいまだ

堂にだものぼらず、抑釋尊西化を隱して火宅の門にいり、甘露をそゝひて普く群萌をうるはす、閻浮出興の大意法界等流の眞詮、たとへば半如意珠を得てへむに似たり、牆面の譏りいかでか免るゝことをえん、もし夫解を學ばゝ凡より聖にいたり、徧ねくこれを學べと、宗師は指南し給ひ、聖道淨土徧學の者にあらずしては、淨佛國土成就衆生のことはりをしり難しと、鎭西禪師も勸勵し給へるものをと、憤然として錫をふるひ、笈を千里に負て師を百城に訪ひ、顯密の玄扉を排き、禪敎の幽關をたゝく、眞言上乘の秘奥は、法幢院常州小松村にあり祐存に、師の叔父なり傳へ、天臺一實の妙旨は、眞源法印に授る、月庵天命の二公に共に丹州の人なり參じて、西天敎外の心印をうけ、野州の敎聲に就て、俱舍唯識の性相をまなぶ、下野宇都宮塙に二宗の名匠ありければ師これに學ばるしかのみならず、甘棠の下をゆかしみ、錫八宗の祖跡に徧ねし、入定の扉を南山に伺ひて、遙に龍華三會の曉をおもひ、護國の床を北嶺に訪らへば、鎭に帝都萬年の夕を期せり、七大の法鼓は權實の響きをきく、三面の僧房は定慧の室にいる、神道の奥義は口決を權禰宜治部少輔にうけ、和歌の玄旨は傳授を頓阿法師にきはむ、凡そ敎庠に遊歷し、禪苑に逍遙して、東參南詢十有三年、內外の典籍涉獵して、つぶさに其徽をはかり、漸頓の法門思ひを屬して、ことゞく錬磨を經たり、遂に道眼圓明に智光透徹せり、爾より德終古に高く、聲遐方に普ねし、慈悲物に應じて、勸導日にひろく、緇素心に傾けて、歸仰月に盛んなりき、師剃度の始に了實上人虛空藏菩薩の靈告を感じて、他日に長夜の法燈をかゝげて、苦界の迷途を照さむものはかならず此兒ならんと懸記し給へると、むなしからざりけりと、今更に貴くこそ。

師應安中京師に遊び、和歌を頓阿法師の門に學ばれしが、六義の幽致を極め、口訣傳授ありけり、其折から古今序註十卷をあらはす、法師亦淨敎の要決をば師にうけられけるとぞ。時に師の道譽叡聞に達し、勅召ありて參內せられけり、龍顏に咫尺して淨土の法門を宣揚ありしに、智辯並びとみて道念面にあらはれ、叡情深く御感まし〳〵て、芳名九重に施せりとなん。

師常州鹿島安居寺に今の神宮寺是なり寓居せられし時、社司の需に應じて神冊を講せられき、以前に神道を傳授せし權禰宜治部少輔、師の博識洽聞に伏し、麗氣記の鈔を撰し給はんことを求めしかば、師やがて述作せらる、其頃無智の輩諸處の道場にして、事を淨業に托し、異をあらはして衆を惑し、或は未學の今按を以て、本宗の正意をみだし、又は闇證の禪和みだりに、聖淨二門の得失を議するたぐひありければ、諸の邪執をくじき、西刹の直路を示さんが爲に、破邪顯正義をあらはす、鹿島の社頭に賓主をまふけて選述せられしかば、亦は鹿島問答ともよべり。

或時ひとり室內にいませしが、秉燭の比過て、のどかに讀書の聲あり、何某の僧あやしみてうかゞひ

かゞひ見るに、師頂門纖月の相より靈光を放ち、曜々として文面の明らかなること、戸隙より日光の照すがごとし、かの僧身の毛よだちて、貴く未曾有の思ひをなし、師のたゞ人ならぬをしりて、深く尊崇せりとぞ、佛圖澄三藏の奇跡は、權化の所爲さる事なれども、末代にかゝる奇特をあらはすにいたりては、師の內證實に計り難きものか、頂門の相によりて、世に師を纖月上人とよべり。

了譽聖冏禪師繪詞傳上畢

了譽聖冏禪師繪詞傳下

師幼學のそのかみより、奉事師長の志切なりといへども、身を立道を行ふ習ひは、心に任せずして遠遊せり、二門の習學に數多の日月を消し、今は解成行遂にしかば、錫を故郷にかへし、瓜連に省覲せられけるに、老師了實上人齡七旬をすぎて、日暮淵にせまれり、別れ久しふして、對面年をへだて、求法の艱辛覺束なくのみ過給ひしに、師いつしか智道兼そなへて、やんことなき有さまなれば、老眼を摩娑して、蓮門の要早を商量し、其智行の深詣を讃歎して、列祖の道地に墜ずして、宗燈のます〳〵輝くことをぞ喜ばれける、師は溫涼定省の孝養をこたりなく、夙夜拳々として、瞻侍の誠をつくされしかば、上人適悅の顏をとき、衆人其至孝に感激せぬはなかりけり、永和四年戊午上人みづから璽書を裁して、瀉瓶の許可を授けらる、時に上人七十五師三十八歲なり。

下總國住人千葉介貞胤は、武勇の名家なりしが、心を佛乘に歸せり、師の道譽を聞て懇請しければ、彼國に赴ひて、頓教一乘の法輪を轉じ他力の秘術を擧揚して、娑婆の厭ふべく、極樂の欣ふべきことはりをさとし、選擇本願の要旨、濁世末代の目足なる趣をのべられけるに、細素集りきひて、信行の掌を合せずといふことなし、貞胤宿善や開發したりけむ、彌陀願海

に歸入して、專修念佛の勤めねむごろなりき、次男德壽丸始めは州の妙見寺に薙染して、密乘を學せしが、師の道德を欽崇して、宗を淨土にあらため、座下に依止す、授戒傳法して、聖聰と號す、賦性溫順にして聰慧逸群なり誠を奉事につくし、心を祖訓に傾け、鑽仰の窓に切磋年を重ぬ、師も道愛深くして、懇に敎誨せられけり、北相馬橫曾根の鄕光明山本願寺にありて、二藏略頌一卷同頌義三十卷を撰せらる、文富義豐にして、一代の綱領を提げ、要をさし玄を搜りて、一宗の轍用を盡す、今に至るまで、梅檀林下の學士心行の要決論議の規範たり、奥書に弟子聖聰に授くとぞしるされける、（同見聞八卷を述せらる）又三代相承の五重傳籍は普導和尙自解佛願の妙旨を祖述し、吉水大師別開眞宗の秘賾を憲章して、專修淨業の眞訣凡入報土の南針なり、師末鈔を製作して是をも一々に口授せらる、其提撕深切なること思ひみつべし、遂に解行蒸辦して、蓮門の柱礎たり一宗の敎行此人を以て附法とせらる、その器宇卓出して智道の秀たること、準知すべきものをや、後に化緣武州に熟して、錫を江戸に留め、貝塚に於て三緣山增上寺を開創せり、大蓮社酉譽上人是なり、福智兼富て宗敎大ひにふるひ、操觚百餘卷みな淨敎の綱要を述るにあらざるはなし、餘澤遠くうるほし、奕葉繁茂せり、今に於て依正の隆盛なること、海內比類まれなり、まのあたり餘慶をうけて、其高蹤を仰がざらめや。

瓜連に歸省ありてよりは、弘法利人を任として、攝化專らなり、學徒蟻慕して講法むなしき日

なく、士庶渴仰して、聽聞踵をつげり、過にし閼滅の時約諾ありければ、下野國にをもむき、大庭山往生寺南瀧坊にして、法幢を建らる、師儀相人を伏し、智辯機に逗じ、穢土の無常を示して、安養の快樂を願はしむるに、遲遲の道俗翕然として、草の如くに風靡し、深く厭欣の宗を仰ぎ、淨業を專修するもの、數をしらず、眞宗の興行尤昌なりき、攝化の餘暇二藏名目を述す、嘉慶元年丁卯淨土傳戒論をあらはせり、台宗の圓戒今は淨土の律儀なる旨を示して、專修の行者も、淨戒を護持すべき趣をぞ述られける、其明年定慧上人の命をうけて、傳籍十八通を著す、良順丁寶二公の連署をこふて、末代に流通す、宗義開發の元由性相兩頓の殿最より、大凡一宗の肝心輯錄せずといふことなし。

嘉慶二年二月廿一日、瓜連の民家より失火して、本堂坊舍盡く灰塵に委せり、丁寶上人よはせて烏有となれり、師奏聞して重ねて紫衣の綸旨を申し、堂塔をも再興せまほしく、企給ひしかども、四來の敎化に餘暇なく、摹繡の著述に寸陰を惜まれければ、上洛もわらまし計りにて、土木の功もはたさずしてやみ給ひぬ、時に抑紫衣の勅旨と緇林の光耀、伽藍の興立は白業の住持にて、等閑に措き難き事なれども、時にあひ人を得てんには必しも難きにあらじ、唯いたましきは、眼前に無惡不造の凡夫惡道の巢もりとのみ悲しさを說法無間の業も轉じて、敎

訓の言下に、彌陀本願に歸入し順次に報土の往生を遂しめなんこと、其益いくばくぞや、若有一人出に苦 生二淨土一者上是名二眞實報一佛恩一とあれば、說法度生 尤 要益なるべし、又述作の道容易ならざるはさることにて、凡入報土の妙法輪は、獨り格外に轉ずれば、口傳なくして、淨土の法門を見れば、往生の得分を失ふといへり、列祖の相承によらずしては、自利々他實に難かるべし、されば、相傳の法門を輯錄し、祖訓の趣を以て註釋をなし給はずんば、後來の心行何にかよらん、我今不レ記將來可レ悲と、章安大師の述懷せられ、將來の癡闇をおもふに、肝腑やすからずと、鎭西禪師の歎息し給ひし、みなこれ大悲の御言葉なりけりと、貴くこそ覺ゆれ嵩明敎の利二於當世一無レ如二說法一益二於後來一專在二著述一と申されけむ、今師も萬般をさしおきて、此二事を專らにせられしは、智者の所見古今一轍なるものおや。

文房を弄して、末代に要法を開示す、應永二年乙亥十二月十九日、傳通記糅鈔四十八卷を編集し畢りて、奧書に云、初自二明德四年癸酉十一月十二日一至二今日一三年之間糅二傳通記十五卷之自他私鈔三本一鈔二勒之一已。その末學の爲に身心を歲月に勞して、述作せらるゝこと、斯の如し、明年丙子四月廿三日、選擇決疑鈔直牒を集成せり、始め筆をたつるの折から、佐竹義秀の兵亂ありて、民間みな荷擔して、たてるさまなり、されば聖淨二門の學徒衣鉢を托するに所なくして、諸國に離散せり、師も故入難處の佛制あれば、兵戈の際にあらんもよしなく、單身笈を負て、州の阿彌陀山に隱る、(一に不輕山と名く常不輕菩薩應現して佛像を彫刻し給ひし靈蹤といへり)此山に巖窟ありて、南に向へり、太陽の光りをうけて、窟內明らかなり、師此に籠居して道業純一なり、徒弟なければ敎育の營みに勞せず、士女詣で來らざれば、接待のわづらひなし、わづかに乾柿を携へ行て、餓に備へ、一鉢のしばしば空しきをかへり見ず、巖もる水を硯にしたで、筆をうるほして、紙にのぞみ述作に孜々として、遂に全篇十卷を草しなせり相傳の義を以て文を釋し理を成す、敎相行儀實に後學の摸範なり、亂をさけ跡をかくせし身にしあれば、聖敎を携るに便りなし、引文典據多くは聞記の儘なりとなん、又古今人の少引取義不レ專守文との給ひし類、今師一世の述作にまゝ見ゆ、後世新學其時を鑑みず、師の意を會せずして、引文の備はらぬをあやしみ、詳略一準ならざるを以て、みだりに擬議するは、實に師の罪人なり夫扶宗爲人の志至切ならざるよりは、いかでか嚴洞に餓をしのびて、心志を肇硯につくさむ、自餘の篇章と雖も干戈の際に往來して、著述せられけむ、其護法利物の慈心小緣の事には侍らじかし、靜に思ふに一句一字の法門も、祖先の血汗にあらざるはなし、流れをくむの兒孫、なをざりに看過することなかれ、常福寺第三世明譽了智上人は、師の補處なり、一寺を彼嚴窟の傍に建立せらる、不輕山莊嚴院高仙寺といふ、今常福寺の配下たり、いにし

へは人を思ふて、尚其樹を愛せり、況や禮跡に臨みて、誰か感激のこゝろなからん。

又經論分流集、心具決定往生義をくじき、本宗の正意をのべて、大悲の極致を敷布し、往生の捷徑を擧示せり、抑師博聞強記にして眼をふれば忘るゝとなし、言を出せば、義を詮し、筆を下せば文をなせり、一代の著述一百有餘卷、みなこれ佛祖の蘊奥を該羅し、心行の樞鍵を發揮す、洞かに頓教菩提の門をひらき、たゞちに超絶易往の道を通せり、願生西方の人、よろしく解行の龜鑑に備ふべきものをや。

兵戈しづまりしかば、不輕山より歸寺せらる、師寺務に參預せりと雖も、行履を世事に混せず、ひたすら厭欣を思として、聲利の跡をふむことなし或夜一行三昧の窓に心を八德の池にすまし、更たけ人しづまりて萬籟寂たりし、折しも、嚴瀨村鏡池明神來現ありて、法施を求め給ひしかば、師やがて法號を授け、菩薩戒を授與し、本願念佛の法施ありしに、明神斜ならず喜び、納受の形を現し給ひぬ、須臾にして、一の龜あり、背に八稜の鏡を負來りて師に獻ず、是すなはち明神法施の德にむくひ給ふにぞありける、其鏡今現に草地山の寶庫にあり、師四海の良導たるはさることにて、神明までも歸仰ありけるは、道德の至りこそとたふとく覺ゆ。

聖聰上人增上寺を武州江戸に起立ありて後も、時々に師の許に來詣して起居を問訊せらる、或時に曰今道容年たけ給へれば、弟子晨昏に水菽のつかへをもなし奉るべけれども、江戸の

弘化を一旦に捨去れば、人法の利にあらじと心やまし、おはれ師武江に來臨ましまさば、いかばかりか本望ならんと申されければ、師忻然として許諾し、明譽丁智坊に草地山を附屬し、應永二十二年二月二日、錫をうつして江戸におもむき、豐島郡小石川のほとりに、閑寂の勝地ありけるに、艸菴を結びて住居し給へり、聖聰上人は、日頃の本意遂られければ常に詣で來りて、孝順の營みいとねんごろにましませり經論を提唱し、要義を商確して、法喜の遊び絕ることなく、宗教を興立し、群生を利濟するの善巧に談話晷を移せり師資の芳契宿緣の逐所、主となり伴となりて、法化を贊成ありけむと、おまりに貴かりけり。

其頃のことなりしが、何處ともなく、一人の化女來りて、佛法を求む、師問て曰、授受の際必ず名を稱すべし、汝も是何人ぞや、いづくより來りしやとの給へば、化女答て曰、妾が住居遠きにあらず氷川の神靈これなり、師の弘法敎化を隨喜し來れるなりと、師すなはち菩薩の大戒を授け、頓敎一乘の妙法を示し給へば、化女歡喜の掌を合せて申さくかくまのあたり法施にあづかり、深く道味を飡す何を以て謝し奉らん、我に靈泉あり供養しまいらせん、阿伽井に用ひ亦度生の緣ともなし給へと、いひ畢りてかきけち失にけり、師わやしみて庭中を望み給ふに、庵近く沸然として靈水涌出せり、是なん法水遠く流れて、普く群生をうるほすの祥瑞なりと、洛東の祖跡になぞらへて、吉水とぞ名けられけり、（今極樂水と稱し地名によへり）師此に

於て泳川明神を念佛守護の宮居とわがめ、社壇を修補せられけり、草庵後に精舍となりて、歳月を經しに此泉かつてかるることなかりき、御當家にいたり、殊更地境を賜りて、別に堂舍を造營せしめ給ふ、委しく次下に記するが如し、元和七年辛酉六月十二日、松平忠輝卿御母堂、阿茶局逝去ありしに、遺言によりて、最初の祖跡に御葬棺あり朝覺院眞譽宗慶大禪定尼と號す、是より宗慶を以て寺號とせり、其後此地松平播州侯の邸となりしかば、寺をうつさる、今の極樂水宗慶寺是なり、靈泉もまたうつりて、今の寺境に湧出す。

師今は寂寞の扉に、老骨を淨業に勵まし、ひたすら聖衆の來迎をのみ待給へるに、桃李ものいはずして、ふもと蹊をなし、いつしか德香四方に薫し細素したひ來りて、津を問者綿々として絶ざりけり、師遁世はさることながら、さすがに悲心ふかくして、應接せられけれは化導再びふるふて大衆輻輳し、梵信催すことをまたずして、いつしかに梵刹を創立せり、無量山壽經寺傳通院是なり、爾しより後は、代々有德の高僧住持せしかば、教を伺ひ行を求るたぐひ年々にたゆることなく、遂に蓮門の叢林となれり　東照神君御入國のみぎり臺命ありて、淨土宗に於て御菩提所たるべき寺院を、御尋ねありけるにも、祖師の遺跡たるを以て、傳通院增上寺を申上げる。

師無量山に留錫ありて、六度春秋を加へぬ稼土の化緣やうやう盡て、淨刹の正因まさに熟し、一夕いさゝか不例にましませしが、自ら往生の時いたれることをさとり、澡浴して身をきよめ、平服を脫して、淨衣に改め如說の行儀を調へて、臨終の道場にぞ入られける、門人に遺囑するに、扶宗護法の任を以し、楂越を垂誡して策修信行の趣を示し、教誨諄々として、聞者感泣せずといふことなかりき、最後に臨みて、繩床に趺座し辭世の偈を書しての給はく、

放行把住滿八十年即今端的知不識日輝于東山月西天

書し畢りて筆をさしをき、合掌して高聲に念佛し、湛然として示寂し給へり、時に應永二十七年庚子九月二十七日曉なり、道俗淨信二尊にたゝすべし、聖衆の迎接眼にあり、淨業精錬四修おつるとなし、樂邦の往詣掌をさすが如し、嗚呼道容西去不返空望　慈雲於曉天之殘月　法音東留無盡普仰智光於長夜之明燈　稱光帝勅して禪師の號をたまふとなむ。

了譽聖問禪師繪詞傳下　畢

跋

聖問禪師以天縱之資闢洪業村累世振蓮門之將廢盛德隆望碩大無朋實爲一宗中興矣其化迹之槩載在傳記而可見焉然其所傳記皆漢語而鹿漫不委悉故讀之者或不知其道化之瀕々堪永歎在也況於豈々不文之人乎苟浴其恩波者誰獨不憾村是乎一山衆徒爲欲新以國字詳其顛末以示

天下隨緣之徒在久鄉而未成今玆當禪師四百回忌之辰乃乞諸鳳譽上人以愜衆徒宿抱鬱公嘉其篤志而不敢辭遂就舊傳補其闕漏譯爲和語以授蒙士時有了道師在不敢憚管涉之勞博訪禪師事蹟於四方附以畫圖彼愼々如道俗之瞻仰禪師高德者據此而有興起焉則其利益之所暨不亦大乎是召所以報祖恩之萬一也維時文政

二年己卯秋九月無量山光雲臺主惟玄迪謹記

明治三十六年五月十九日印刷
明治三十六年五月廿二日發行

佛教各宗續高僧傳實傳
定價金六拾錢

編輯者　江見忠功　東京市日本橋區本町三丁目八番地
發行者　大橋新太郎　東京市小石川區久堅町百〇八番地
印刷者　水谷景長　東京市小石川區久堅町百〇八番地
印刷所　合資會社博進社工場
發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

著作權所有

續帝國文庫

全部五十冊中判洋裝
洋布脊皮金字入美本
紙數一冊約千頁

正價（一一冊金六十錢 六冊金參圓五拾錢 十二冊金六圓九拾錢
廿五冊金拾參圓 全部五拾冊金廿五圓）郵稅一冊拾六錢

第壹編 眞田三代記 博文館編輯局校訂
附 日本武士鑑

第二編 近世說美少年錄 博文館編輯局校訂

目次
- 近世說美少年錄 玉石童子訓……曲亭馬琴
- 近世說美少年始末補遺
- 馬琴の美少年と其人物……文學士大町桂月君

第三編 日本歌謠類聚 上卷 大和田建樹君編

第四編 日本歌謠類聚 下卷 大和田建樹君編

第五編 諺紫田舍源氏 博文館編輯局校訂

第六編 竹田出雲淨瑠璃集 水谷不倒君校訂

目次
- 小町炭燒 添草土器師七小町
- 白髮寶盛加賀國篠原合戰
- 江戶文七髮結屋男作五雁金
- 大阪文七緋屋男作五雁金

第七編 朝夷巡島記 博文館編輯局校訂

目次
- 太平記大塔宮鐵
- 綱目
- 內裏大友眞島
- 南朝正平四年北朝貞和五年太平記菊水の卷

第八編 兒雷也豪傑譚 博文館編輯局校訂

第九編 江戶作者淨瑠璃集 水谷不倒君校訂

目次
- 河井正宗由來
- 芭蕉翁俳諧濫觴
- 矢口後日荒御靈新田神德
- 伊達競阿國戲場
- 吉野靜千本櫻
- 狸和尙勘化帳
- 化競丑滿鐘

第十編 前々太平記 博文館編輯局校訂
附 前太平記

目次
- 右大將鎌倉實記
- 諸葛孔明軍談
- 時代世話新淨瑠物語
- 源氏櫻
- 大和田建樹君編
- 鐵驪宮戶川
- 詔重血紅歟
- 自來也物語
- 小栗判官車街道
- 蝶雙々曲輪日記
- 葛蒲前操弦

第十一編 太平記 博文館編輯局校訂

第十二編 紀海音淨瑠璃集 水谷不倒君校訂

目次
- 末廣十二段
- 殺生石
- 八百屋お七
- 賴光新跡目論
- 傾城國性爺
- 花山院都巽
- 三代記
- 鎌倉三代記
- 神功皇后三朝貢談
- 吳越軍合戰
- 東山殿室町合鐘
- 傾城無間鐘
- 小野小町都年玉
- 新百人一首
- 忠臣實人形
- 三井寺開帳
- 本朝五翠殿
- 曾我姿富士
- 甲陽軍鑑今樣粧
- 義經新高館
- 鎭西八郎唐五船
- 心中二ツ腹帶
- 玄宗皇帝蓬萊鏡
- 雛波橋心中

第十三編 續近松淨瑠璃集 水谷不倒君校訂

目次
- 百日曾我
- 源氏烏帽子折
- 長者女腹切丸
- 蟬用明天皇職人鑑
- 心中二枚絵草紙
- 會我扇八景
- 戀八卦柱曆
- 茨兵衛おさん
- 卯月の潤色
- 二郎兵衛今宮心中
- 百合若大臣野守鏡
- 吉野都女捕
- 天神記
- 蛾歌加留多
- 曾我會稽山
- 本朝三國志
- 傾城島原蛙合戰
- 井筒業平河內通
- 後太平記四十八卷津國女大池
- 女殺油地獄
- 信州川中島合戰
- 心中宵庚申

第十四編 近松半二淨瑠璃集 水谷不倒君校訂

第十五編 後太平記 博文館編輯局校訂
附 北條三代記

第十六編 脚本傑作集上卷 發賣禁止絕版

第十七編 京山全集 博文館編輯局校訂

目次
- 奧州安達原
- お花半七京羽二重姿氣質
- 小夜中山鐘由來
- 傾城阿波の鳴門
- 東海道七里濱
- 新版歌祭文
- 替唱歌糸の時
- 役行者大峯櫻
- 山城國音生塚
- 關寺小町
- 關寺稚稱新田系圖
- 三日太平記
- 萩大名傾城敵討
- 道中龜山噺
- 時代織室町錦繪
- 孝行譽劍菱
- 酒屋
- 女六部仇討宇津谷
- 鷲談桃花流水
- 傳記
- 早引說要集
- 五人女都の紅粉筆
- 高尾丸の稻葉
- 奴勝山愛玉丹前
- 鴻田舂藝者容紋
- 煙草抄
- 腹佳話鸚鵡八藝
- 復讐熊腹帶
- 小說女楠樹
- 江島御利生對賣笠
- 化粧坂團忠龜鑑
- 三國小女郎物語
- 梅若松若竹取物語
- 高尾

第十八編 落語全集 石橋思案君訂

目次
- 醒睡笑
- 鹿の卷
- 替呂利語
- 落語笑話登口の山
- 輕口舍莊子

第廿四編

次目

●●●

第卅三編 續々紀行文集 全 九

目次

- 世帯平氣雜見話 乾州三太平記
- 麻疹心得 三州太平記
- 滑稽列國 英野子著
- 評判記 珍魚珍貝後編
- 猿々 博文館編輯局校訂
- 昔物語 秋齋閑人著
- 女不用心 流田舍草紙
- 雜の司 諸勸ケ谷丸
- 三國太郎 再來傳
- 吉原遊女 鐵砲洲水閘
- 竹生島詣 千代松作
- 大悲千禮面 觀世音菩薩
- 大浮世 操九寸五分
- 辭世 浮木端古歌
- 江戸太郎 發句集
- 桃太郎 後日噺
- 血祭紅葉 狩
- 鉄砲夢想 妙藥
- 眞贋 鑑定家
- 御目見 秘傳
- 浦山太郎 後日噺
- 兵衛門 左衛門
- 高慢鼻 用心棒
- 以來 二分狂言
- 從 脚日記
- 天狗 得知君訂

第卅四編 黃表紙百種 全集

校訂 博文館編輯局

- 金々先生 榮花夢
- 此奴 和尚落
- 鼻ケ高 慢汁
- 京鹿子 娘道成寺
- 八代目 團十郎
- 親敵討 心中鬼
- 敵討 早染草
- 四天王 大江山
- 三幅切 對紫根
- 其唯 我獨尊
- 元祿 太平記
- 入安 桃太郎
- 山姥 利勘亭
- 初時雨 傘日和
- 花盛 江戸紫
- 照降 傘日和
- 越路 吹雪
- 連獅子 雙面鑑
- 梅 與兵衛
- 深 雪曙
- 催 眠術
- 金儲 花盛衰
- 諸藝 上達
- 國 尽
- 草 履
- 取 帳
- 雁 取
- 多 煙草
- 新 吉原遊女
- 間 男女
- 數前後 兩名國 取

第卅五編 俳優全集

校訂

- 枝 珊瑚樹
- 三 日月お せん
- 聞 勇伝八 郎
- 其 儘お 夕霧
- め 雛の 調度
- 巻 風俗 女三 國志
- 爰 伽羅 先代 萩
- 伊 達模 様
- 和 歌三 神由 來噺
- 手 前味 噌
- 天 一坊 實記
- 平 安城 女郎 花
- 關 東下 り
- 輕 上洛 日記
- 東 海道 中膝 栗
- 御 鳥羽 繪圖 帶
- 天 晴日 和
- 常 陸帶 記
- 宮 川の 渡し
- 浦 島太 郎
- 奥 の小 道
- 小 金の 御紀 行
- た 毛剃 記
- 豐 後節 發祥 記
- 夢 の浮 橋
- 伊 豆の 國土 産
- な ぐさめ 草

第卅六編 俗曲 大全

校訂 長井金升君

- 一 中節 のの 部
- 富 本節 のの 部
- 清 元節 のの 部
- 長 唄 唄ひ 物
- 端 唄 逸々 の唄 の部
- 都 流 行歌 の部
- 本 樹眞 砂子 雪
- 三 太郎 天狗 酒
- 地 獄極 樂 道中 記
- 虛 生夢 魂 其前 日
- 狂 尾張 名古 屋上 日記
- 頓 智若 殿樣 氣
- 杜 若城 下繁 昌記
- 傾 城雙 蝶が 花山 廓彦 山櫻
- 蝶 人情 本紀 夢の 通ひ路
- 向 ふ傾 城名 寄尽 地獄 極樂
- い ろは 四十 八手 裏表 錄
- 流 行三 味線 指南 車
- 色 男意 氣地 球來 記
- 博文館編輯局校訂

第卅七編 續々紀行文集

校訂 岸上賀軒君

- 東 關紀 行
- 熊 野紀 行
- 鹿 苑院 殿御 一代 記
- 小 唄集 大津 繪節 のまく り
- 大 津繪 節の 歌
- 情 歌 戀の 部
- 新 内節 のの 部
- 常 盤津 節の 部
- 圓 八節 のの 部
- 河 東節 のの 部
- 錢 太夫 節の 部
- 北 山行 幸記
- 往 吉野 行幸 記
- 高 野紀 行
- うたゝ ねの 記

第卅八編 續馬琴傑作集

博文館編輯局校訂

- 光 源氏 一代 記
- 紫 日記 帖
- 曙 紀行
- 東 海道 中膝 栗
- 國 尊仇 討
- 陣 太平 記
- 光 源氏 一代 記
- 末 遊行 の上 人
- 晴 日暮 硯
- 丁 蝶々 夫人
- 蝶 長崎 の巻
- 長 崎行 役日 記
- 道 芝居 の初 日
- 島 戊辰 紀行
- 津 波打 際
- 壬 申旅 の記
- 船 中日 記
- 甲 子夜 話
- 杜 若艸 紙
- 城 下の 人々
- 尾 張名 古屋 城
- 狂 言百 番
- 加 賀國 松任 越路 山莊 遊記
- 松 任日 記
- 筑 紫紀 行
- 東 海道 中膝 栗
- 京 都名 所圖 會
- 正 名百 人一 首

第卅九編 脚本傑作集

校訂 水谷不倒君

- 隅田川花御所染
- 日次 四天王產湯玉川開
- 三十三石燈始
- 色競かくし紅翅燈籠
- 伊勢音頭恋寒苦鳥
- 隅田春著者無賀
- 御ひいき勸進帳
- 復讐奇譚稚枝鳩
- 目次 阿古義兵衛實々記
- 新累解脫物語
- 青砥藤綱摸稜案
- 絲櫻春蝶奇縁

第四十編　續京傳三馬傑作集　博文館編輯局校訂

目次
- 文盲流行歌
- 吃又平名畚助太刀
- 戯場花牡丹燈籠
- 玉藻前三國傳記
- 敵討孫太郎蟲
- 秋津島仇討物語
- 錦繪櫻木朝文粹
- 妹背山長柄文臺
- 雛有挙行姫
- 松竹梅取話
- 日高川清姫物語
- 於六櫛木曾仇討
- 客衆肝膽鏡
- 風雲龍九郎倫盜傳
- 雲非月於仙物語
- 女途三日寸口切
- 朝茶湯一輪車
- 敵討筑紫不知火
- 強盜專太郎強婆の蛇柳
- 長髓猪人傳
- 納言宿傘
- 瀧川燕子奇譚
- 契情廻り合傘
- 優姫侠双紋
- 侠蝶全傳
- 洞房繁々千話
- 故談

第四十一編　釋迦八相倭文庫　上卷　博文館編輯局校訂

目次
- 釋迦八相倭文庫
- 旅硯富士見西行
- 御所奉公東日記
- 假名反古一休草紙

第四十二編　釋迦八相倭文庫　下卷　博文館編輯局校訂

自初編至四拾編

目次
- 釋迦八相倭文庫
- 自四拾壹編至大尾及拾遺

第四十三編　種彦短編傑作集　幸堂得知君校訂

目次
- 梅櫻報布袋釋日記
- 青竜窟摸様紹介染地
- 女合法辻談義
- 花吹雪若衆宗玄
- 曾我昔狂言
- 桔梗辻千種移紙
- 姫金平昔物語
- 醜案道中双六

第四十四編　俊傑神稻水滸傳　上卷　博文館編輯局校訂

目次
- 浮世形六枚屏風
- 寶對花龍
- 博多と三味線
- 比翼紋松に鶴賀
- 新羽二百屋の紫陽花
- 忍笠時代時絵
- 怪色猪口は暦手
- 昔錦益
- 娘狂言三勝話
- 一休咄問答
- 出世奴小萬の傳

第四十五編　俊傑神稻水滸傳　中卷　博文館編輯局校訂

第四十六編　俊傑神稻水滸傳　下卷　博文館編輯局校訂

第四十七編　近世奇談全集　山田法學士田山花袋開君校訂

第四十八編　名家短篇傑作集　幸堂得知君校訂

目次
- 新著閑集
- 想山著聞奇集
- 老媼茶話
- 三州奇談
- 復讐煎茶漉腸（京傳）
- 復讐猫魅橋由来（傳笑）
- 會談與暗門人雅話（振鷺亭）
- 線田久八強力譚（曙慶）
- 帶屋お蝶三世談（正誠）
- 父母怨敵現報破（東子）
- 阿逸樂一文字一九（南杣）
- 敵討女夫似我蜂（三馬）
- 腕一心命（三馬）
- 四國奇談月廼夜神樂（德升）
- 敵討宿六娘（三馬）
- 敵討華山大全（東里）
- 溺愛仇討（月池）
- 志道軒往古講釋（京傳）
- 十三絃孝子勤操（馬琴）
- 戻駕籠枝郷錦繪（京山）
- 憑女房仇討双六（姥討）
- 小說比翼文（馬琴）
- 床飾錦額無垢衣（彦二）
- 黑蜥太郎雨夜譚（其寧）

第四十九編　佛教各宗　續高僧實傳　江見水蔭君校訂

目次
- 慈覺大師一代略記
- 興教大師實傳
- 圓明國師御傳
- 蓮如上人御傳記
- 四行物語
- 智證大師一代略記
- 怪談岩倉萬之亟（南北）
- 絲車九尾狐（京傳）
- 浪花浴衣園七緒（南北）
- 昔唄猿狂言（田山）
- 油丁製菜種黃表紙（仙果）
- 指針太郎素傑譚（春文）
- 照手池浮名冠絵（馬琴）
- 廿三夜待（山鳥）
- 枕琴夢通路（仙果）
- 大盛舞花街始（三馬）
- 杷主譚師行狀絵詞傳
- 深井元政上人御傳記
- 明惠上人御傳記
- 契沖阿闍梨傳
- 一休諸國物語現會
- 役行者御傳記圖會

第五十編　名家漫筆集　博文館編輯局校訂

目次
- 雲萍雜志
- 蚯蚓の繰言
- 瓦礫雜考
- 愚痴草
- 理齋隨筆
- 假名世說
- 閑田耕筆
- 芳州先生たはれ草
- 孝經樓漫筆
- 玄洞放言

本邦古來よりの文學稗史書類汗牛充棟も啻ならずと雖其價値あるもの多くは浩瀚にして其一部を需めんとするも容易ならず況んや數百年の久しき或は回祿の災に罹り或は忌諱に觸れ殘存のものも又漸く一部人士の庫中に埋閉せられ漸次湮滅に歸するの傾向あり今にして是れが保護の道を講ぜざれば古人が刻苦一生を費やせし佳作も終に跡を絶つに至らんとす慨すべきなり本館茲に見る年あり玆々として之が蒐集探索に從事し爨きに帝國文庫全部五拾卷の大成を告げ重ねて續帝國文庫を刊行し其完成の期も將に近きにあらんとす今や蒐め得たる原本無慮數萬卷の多きに達し之を往時の木刻に顧れば彫板數十の倉庫も尚不足を感ずるなるべし前後百卷紙數拾萬餘頁實に帝國文學の寶庫と謂ふべし斯る空前の大出版を完ふする必竟聖代の餘澤と購讀諸君の愛顧に依ると雖抑又文界に貢献する所尠少ならざるを信ず、嚴密の校正精良の紙質堅牢の裝釘又其特色なりとす大方の諸彦幸に愛讀を賜はらんことを

帝國文庫

全部五十卷

洋裝頗美本

正價 ●壹冊金六拾錢 ●五冊以上三分引 ●十冊以上五分引 ●拾冊以上八分引 ●卅冊以上一割二分引郵稅壹冊拾六錢

自第壹編至第四編　眞書太閤記　第拾四編　柳澤、越後加賀、伊達　騷動實記

第五編　源平盛衰記　第拾五編　種彥傑作集

自第六編至第八編　南總里見八犬傳　第拾六編　京傳傑作集

第九編　東海、奥羽木曾、江島　道中膝栗毛　第拾七編　星月夜鎌倉顯晦錄　北條九代記

第拾編　梅曆春告鳥　第拾八編　通俗十二朝軍談、通俗武王軍談、通俗明淸軍談

第拾壹編第拾貳編　通俗三國志　第拾九編　甲越軍記

第拾參編　三馬傑作集　第貳拾編　通俗吳越楚軍記　通俗漢楚軍談

第貳拾壹編　楠廷尉秘鑑　第參拾九編第四拾壹編　四大奇書

第貳拾貳編　風來山人傑作集　第四拾編　續氣質全集

第貳拾參編第貳拾四編　西鶴全集（發賣禁止）　第四拾貳編　近松時代淨瑠璃

第貳拾五編第貳拾六編　滑稽名作集　第四拾參編　大岡政談

第貳拾七編第貳拾八編　其磧自笑傑作集　第四拾四編　佛教各宗　高僧實傳

第貳拾九編第參拾四編　人情本傑作集　第四拾五編　仇討小說集

第參拾編　氣質全集　第四拾六編　馬琴傑作集

第參拾五編　珍本全集　第四拾七編　淨瑠璃名作集

第參拾六編第參拾七編　赤穗復讐全集傳　第四拾八編　俠客傳全集

第參拾八編　水滸傳　第四拾九編　續仇討小說集

自第參拾壹編至第參拾參編　忠臣藏淨瑠璃集　第五拾編　近松世話淨瑠璃

12/386 ㅎ 파9A13

各宗本山名所圖會

石倉翠葉君著

博文館發兌

本派本願寺名所圖會　全壹冊洋裝菊判美本　正價六拾錢郵稅拾錢

大谷派本願寺名所圖會　全壹冊洋裝菊判美本　正價四拾錢郵稅六錢

佛光寺名所圖會　全壹冊洋裝菊判美本　正價廿五錢郵稅四錢

官國幣社圖會　日光名所圖會　全壹冊洋裝菊判美本　正價六十五錢郵稅二十錢

日蓮宗各本山名所圖會　全壹冊洋裝菊判美本　正價五拾錢郵稅八錢

成田山名所圖會　全壹冊洋裝菊判美本　正價三拾五錢郵稅六錢

續刊

善光寺名所圖會

高野山名所圖會

永平寺名所圖會

比叡山名所圖會

淨土宗各本山名所圖會

180.28
E42b

015438-001-8

180.28-E42b

仏教各宗高僧実伝

江見　水蔭／校

M36

ABC-1090